資料

# 総合福祉と大学教育

村上　千鶴子[1)]

# Comprehensive Welfare and University Education

Chizuko Murakami[1)]

**要約**：
大学教育においては、人格の陶冶に資する教科目を提供し、視野の広い柔軟な人材の育成に努めること、教育成果に対しては正当な査定・評価を工夫することが重要であることが指摘された。その目的のためには、自由で民主的な自律的規制のある大学の建設が不可欠であり、さらに、学生個々の長所を最大限に引き出すためには、スタッフ全員が一丸となって支援する体制の整備が期待されること、学生が誇りを持って大学生活を送れる状況を形成すること、大学教育の介入とその成果に関して研究立案の可能性があることが示唆された。

**キーワード**：総合福祉、大学教育、一般教養科目、教育成果の査定

浦和大学は総合福祉学部として、福祉・保健・医療の学際的視野に立って福祉教育を行うという理念の下に始動したが、総合の意味するところをもう一度確認しておきたい。以下、筆者の経験した医学教育との対比から検討する。

これまでのところでは、総合福祉の総合の意味は、福祉と保健、医療に限られているようにみえるが、筆者は、総合により広い意味を付与したいと考えている。総合の意味として、人文、社会、自然科学全般にわたる知識の習得を目指すものでありたい。日本の医学教育におけるひとつの誤謬は、このような広い学問分科の習得を軽視してきた点にあると思う。その歪みが、病的なヒエラルキーを温存・助長し、医療過誤やそれを隠蔽する体質を保持し続けてきたと考える。福祉教育が同様の過ちを犯すことは避けなければならない。そのためには、より広い視点に立って、事態の意味、正誤を正しく評価することのできる人材を育成する必要がある。その目的に向けたカリキュラムに期待されるのは、総合人間学ともいうべき、学問分野の広がりであり、充実である。

福祉分野でも、社会的弱者の救済というスタンスから人間全般の生き易さへと目的が一般化、広範化してきている。それに併せて福祉教育も広がりをもって応えなければならない。それによって、視野の広い、人間的に幅のある柔軟な人材が育まれ、彼らが福祉現場で十分に力を発揮できる時、日本の福祉現場の未来は明るいといえよう。

筆者は社会学、心理学、医学の3つの学問分野で正規の大学課程を経験したが、その中で最も心に残っているのは、文科系学部で学んだ一般教養科目であった。それは、村上陽一郎氏の「自然科学史」、桑原万寿太郎氏の「生物学」、江上波夫氏の「日本古代史」の講義であった。これらはいずれも当時の専門とは全く関連性のない科目である。しかし、これらの科目がその後の筆者の思想形成に大きく寄与したことは間違いないのである。

例えば、当時はまだ新進気鋭でそれほど有名ではなかった村上氏の講義から、歴史的評価の相対性、科学理論の根底に信仰や信念が根ざしていることなどを学んだ。

しかし、長じて学んだ医学部のカリキュラム中

1）浦和大学総合福祉学部　　Faculty of Comprehensive Welfare, Urawa University

にはそのような感銘深い授業科目は存在しなかった。人のあり方、価値観をも左右する教養科目の重要性は、若いときにこそ力を発揮するものなのかも知れないし、医学部の教養科目構成が貧弱であったのかもしれない。後者であれば、高度な専門知識とともに豊かな人間的成長が望まれる医学教育においては致命的な欠如であるといえよう。その意味では、医学部を大学院課程にしようという試みは当を得ている。対人サービスに従事する者を育成する福祉関連学部においても、人間教育は大きな意味をもつ。社会的弱者に提供する知識・技術の習得とともに、他者との関係性を豊かにする人間的成長を目指さなければならない。

畢竟、これら一般教養科目の充実の如何が、大学と専門学校、予備校を区別するものであろう。現在の医学教育の大きな誤謬は、入試偏差値のみ高い者に、科学技術、科学知識だけを教えれば良いという偏狭な驕りの中から生まれたと言っても過言ではあるまい。福祉教育においても同様の誤りに陥ることは、さほど困難ではないだろう。実学主義を最大限に活かすためには、それを背後で支える人間としての哲学・教養の練磨が必須であるという認識をもつ必要がある。

大学の専門学校化は、大学としての存在意義を根底から否定するものであり、その愚に陥らないよう充分留意しなければならない。特に、卒後に国家試験が控えている場合、受験予備校と化す危険が大きい。国試対策として大学が提供できる最良のものは、4年次夏季休暇中に、関連する最良の業者の講習を設定し、市価の半額で提供すること、国家試験があることを学生たちに時々思い出させること、自己選択・自己責任の態度を養成することではないだろうか。受験予備校化して、青春の貴重な日々を無に帰するの愚だけは避けたい。医師国家試験準備で我々がかつて受けた予備校紛いの詰め込み教育は、若い学生からは先端技術や一般教養の習得の機会を奪い、再入学者からは勉学意欲を殺いだ。

では、具体的にどのようなカリキュラムが望まれるのだろうか？ひとつは、多様な教科の提供であり、その選択の自由度を広げることである。近い将来の学部再編に向けて、幾つかの提言をしたいと思う。ひとつは、学部編成である。試案として、以下のようなものを提示したい。現在は総合福祉学部となっているが、これを総合人間学部として、以下に総合福祉学科、心理臨床学科、教養学科を設置し、学科間共通の選択科目を多く設定する方法である。教養学科は他学科に共通科目を提供するとともに、独自のプログラムで広範にわたる学問分野をカバーし、個々に専攻をもつ。あるいは、人文科学系、社会科学系、自然科学系、総合教養学系の各学系のもと、広い学問分野を提供し、そのうちの社会科学系では、総合福祉専攻、心理学専攻などに重点を置く。

第2に、実習に対する考え方も確認しなければならない。徒に実習時間を増やすことは、他の教科の削減に通じるものとして慎重でなければならない。本学でも体育、語学、一般教養の卒業必要単位が少ない。早期に成長が要請される理系分野にあっては、専門科目の早期履修が望まれるが、他分野においては、その限りではないだろう。一般教養の学習が阻害されることの弊害も考慮される必要があろう。湯川秀樹博士の中間子論も、豊かな漢学、哲学、芸術の素養なしには、生み出されてはいないはずである。体験学習は、現場勤務が最良の教師であり、多くは現場に委ねて、規定の実習時間をいかに充実させて組み立てるかといった実習内容の練磨、学生たちの実習への自我関与を高める工夫こそが必要なことであろう。

第3に提言したいのは、教育の改革とその成果の査定に関する問題である。これには留意しなければならない点がある。科学的・客観的な評価のためには、多面的なアプローチを要するということである。その例として挙げると、医学教育の改善とその成果について論じたA大学関係者の講演があった。改善への努力には頭が下がる思いであるが、対象の評価を見誤るとその成果の評価も異なってくることの良い例を提示している。そこでは2つの問題点が指摘できる。ひとつは、査定対象の評価の問題である。大学入学試験の偏差値は、分り易いが数ある能力指標の中のひとつに過ぎない。A大学の場合、偏差値は特別高くはないが、国家試験合格率や卒前・卒後研修の評価が高かった。その因を大学教育の成果に求めたいところであろうが、科学的な評価のためには、介入手段の評価とともに、対象集団の属性を考慮する必要がある。

A 大学医学部では再入学者が3割から4割弱と多く、医学を志す問題意識、動機付け、一般教養の高さなどに他大学の学生に比して大きな相違があったと考えられる。また、稼働しながらの受験などハンディを背負った中で入学するには、偏差値には現れない潜在能力の高さが要求される。そのような同輩と共に勉学することで、若い医学徒が受ける影響も看過できない。事実一例を挙げると、難解な物理分野などでは、年長の物理専攻者が自主的に勉強会を開催し、同輩の試験合格に向けて快く無償の援助をしていた。前述の潜在能力、動機付け、意識の高さに、そのような地道な助け合いも相俟って、それなりの成果をもたらしたと考えた方が事実に即していると思われる。もちろん、解剖実習、BSL（bed side learning）の衝撃と不安、あるいは資格取得後全責任を負って新米主治医として始動する時の孤独と自負は良い教師としてタケノコ医師を導く。しかし、これは医学部共通の事態であり、A 大学に限ったことではない。

本学でも、学生集団の属性を考えた場合、全般に入試偏差値は余り高くはないが、その背景を慎重に考えると、真面目に出席しているが成績不良の者、怠学により成績が振るわない者、部活や他の学校生活にエネルギーを過大に注いだ者、家族問題、身体的・精神的問題を抱えて集中できず成績が振るわなかった者など様々な学生が存在する。彼らの能力にも個人差があり、それらに画一的に取り組むことは、乱暴に過ぎると思われる。個々に相応しい取り組みが求められる。そのためには、対象の適切な評価が、まず実施されなければならない。

対象と成果の評価に関するもうひとつの問題点は、学生による授業評価など適切なフィードバック制度を実施していない場合に、教員サイドの独り善がりな評価に陥る危険があるということである。医師であれ大学教員であれ、オールラウンドに優れた人間という訳ではない。人生の比較的早期に幾らか学業成績が良かったというだけのことであり、職業的技術や倫理、人格の優秀性については何も保証されてはいない。だからこそ対象の声に謙虚に耳を傾けなければならないのではないだろうか。

以上をまとめると、大学教育において大切なことは、人格の陶冶に資する教科目を提供し、視野の広い柔軟な人材の育成に努め、対象の特性を的確に評価し、教育成果に対しては、正当な査定・評価を工夫することであろう。そのためには、私心に囚われない適材適所の人員配置をし、教員も学生ものびのびとその能力を発揮できる自由で民主的な自律的規制のある大学を目指すことであろう。また、学科教育に留まらず、学生ひとりひとりの長所を最大限に引き出す努力を惜しまないことであろう。勉学、スポーツ、サークル活動の別を問わず、学生たちが活き活きと大学生活を楽しみ、浦和大学生であることに誇りをもてるような大学作りに向けて、大学当局、教職員諸氏には奮闘を期待したい。

ある程度のエネルギー支出、経済的覚悟をもって望むのであれば、意図的・操作的な教育介入とその成果について、体系的な研究計画を立案することも考慮に値しよう。

**参考文献**

1. 小杉英了，『シュタイナー入門』，筑摩書房，東京，2000
2. 村上陽一郎，『西欧近代科学―その自然観の歴史と構造』，新曜社，東京，1971
3. 村上陽一郎，『安全学』，青土社，東京，1998
4. 湯川秀樹，『天才の世界』，小学館，東京，1973
5. 湯川秀樹，『学問について』，岩波書店，東京 1989